

---

# ソーダの星

高橋うがい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソーダの星

### 【Nコード】

N2624F

### 【作者名】

高橋うがい

### 【あらすじ】

今日も適当に授業を聞き流して、昼休みに屋上で音楽を聴きながら弁当を食べた。そして星に誓った。ただなんとなく毎日をやり過ぎすだけじゃ駄目になって、なんとなく思った僕の話。

「退屈な日常の繰り返しは、己の大事な、大事な感性を錆びつかせる…」

シャープペンを指の間で踊らせながら、詩人のようなことを考えてみるが、言いようのない漠然とした気分は晴れなかった。

教室の重鎮である黒板には、教室の最高権力者である『教師』の書いた教科書通りの思想や歴史が並べられている。僕はそれとクラスメート諸君を交互に見てみる。『浮かない顔』『退屈』『セックスしてえ…』『弁当まだかよ』大半がこのようなくだらぬ思念を抱きつつもノートをとっている——ように見える。僕と同じってわけか。

はあ、と小さくため息をついて僕も一応、形式上、流れに沿うようにノートに書き写すことにした。

1. 他の星との干渉は禁じられている。
2. だが一部の文化交流は認められている。しかし、政府はその交流を公開することはない。
3. 宇宙はひとつ。

毎度毎度ご苦労さん。宇宙論理科学の授業である。

ふあ、と控えめなあくびをしながら、黒板の内容を一字一句間違えることなく書き写したノートをぱたんと閉じた。

宇宙なんて僕が産声をあげた頃にはすでに身近なもので、海外旅行とほとんど大差なかった。『なんとかロケット』の量産に成功して、『なんとか燃料』が無限に溢れて、それらを発明と研究をし発表した『なんとかって科学者』はノーベル賞をもらった翌日に暗殺された。暗殺したのは「人類の宇宙侵略を防ぐ！ 愛する宇宙を守る！」という「よくもまあそこまで事を飛躍できるなあ」と正直苦

笑してしまう団体の一味だった。あっさり逮捕された暗殺犯は言った「俺を死刑にしろ。そして俺の骨を愛する宇宙に流してくれ」。それは宇宙に塵を流すこととなり問題になる為、当然却下されて、暗殺犯は現在も囚役中だ。…ちつとも可哀想じゃない。

——これが僕の宇宙論理科学の授業で学んだ知識。ロケットなどにはちゃんとした正式名があるが、僕のレンコンのような脳みそには記憶されていない。

「さっさと授業終わらねえかな…」ぼつんと本音を漏らしてしまった。しかし、教室には軍隊が行進するように一定のリズムでシャーペンシルとノートのしゃかしやか音が響いていた為、一度怒るとねちっこく学期が終わるまで執拗に絡んでくる通称『納豆教師』の岡部には聞こえなかったようだ。間一髪。ぎりぎりセーフ。

チャイムが『いい加減ほかの仕事もやってみてえよ』なんて思っているかも知れないが、一応…といった感じに授業の終わりを告げた。

クラスメートの間抜けな伸び、文字にならない疲労の言葉、教師の起立を求める声、椅子が軋みながらぶつかる音。この世の混沌を感じた…大袈裟かな？

僕は空腹をずるずると引きずりながら、教室を出た。手には弁当を持って。

屋上には誰もいなかった。それもそうだ、枯葉の舞う季節だし、肌寒いし。好き好んでこんな場所で一息つくこうとするやつなんて僕ぐらいなもんだ。

無数の鳥の糞をおぼつかない足取りで避けて、枯葉のつもった一角に座る。きしきし、と僕を歓迎するように音をたてる枯葉に愛嬌のよさを感じた。

「今日の弁当は何かな」棒読みで独り言。「…うん、普通だな」箸でつまんだ唐揚げを口の中に放り込み、よく噛みながら、学生ズボンのポケットをまさぐりイヤホンと携帯電話を取り出した。

ごちゃごちゃと携帯電話をいじり、イヤホンを両耳に挿入すると、ほどなくして軽快な音楽が僕の中に侵入してきた。この瞬間は一種の快感だと僕は思う。平穏で退屈な暮らしがちょっとした刺激に犯されるような…。

「ふふんいっとつび」 適当に口ずさみ、セッション。

秋風が顔に柔くぶつかって、反射的に目を閉じる。「えっと、こういうのを何ていうんだっけ：『ナイスミュージック』だっけ」すこし格好をつけた片言な独り言。

弁当を食べ終わると同時に曲も終わって、次の曲が僕の暮らしの先っぽを犯し始めた。夜の次に朝がくるように当然の流れで。

面倒なことばかり、しなくちゃいけないことを面倒なことと呼んでしまう年頃の僕を包み込み、そっと微笑かけるバンドのボーカルである”ジョン”はもうこの世にはいない——と思う。僕がこの音楽に出会ったときの年齢を考えると：残念だけど。

「新譜はまだかな」期待薄だけど、願うことはやめられない。

屋上の柵からすこし身体を乗り出してみる。秋風をいっそう強く感じる。空にはまだ昼過ぎだというのに、薄ぼんやりと星が見える。その中でひとつ綺麗な水色の星がある。

「あ、ソーダの星だ」

ソーダの星を見上げながら、手を合わせる。「君も退屈だろうけど、お互い頑張ろうな」その遠い星から贈られてきたであろう音楽に満たされながら、名も知らない同級生に語りかけた。

「あの星に行くまでどれくらいのコストと時間がかかるのだろうか：」

——もうすこし勉強して大人になって、『プレイベート円盤』を買いおう！

——そしてソーダの星にあるであろう”ジョン”の墓参りに行こう！何度目かの昼休みに、何度目かの目標をたてた。

チャイムが聞こえ、僕は屋上を去る寸前にイヤホンから流れ込む音楽がぴたりと止んで、耳元で、でも遠くからだと感じる、言葉が聞こえた。

——「君も退屈だろうけど、お互い頑張ろうな」

今日の目標は守れそうだな気がした。ソーダの星に住む僕と同じく退屈に犯されている君に誓おう。

——終——

## （後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

さっさと書き上げて投稿しようと思っていたのですが、あら不思議こんなにも遅くなってしまいました。反省しています。

内容についてですが、平たく言うと地球（らしき星）に憧れる宇宙人の話です。僕は宇宙人の存在そのものを信じていませんが、もしいるのであればそれはエイリアンやらE・Tのような無機質な姿（生活）をしているのではなく、ぼくら人間に近いと考えています。ですのでこのような小説を書きました。派手なものではなく身近にあるような地味で何にもない暮らしを未知なる生物目線で…。

ではでは。ほかの小説も読んでいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2624f/>

---

ソーダの星

2010年10月8日15時21分発行